12
881
12

花散里

巻名 橘の香をなつかしみ時鳥花ちる里をたつねてそとふ
細 歌によりて号せらるゝ也 源氏廿四歳夏五月のころ也 賢
木の巻の末と同じ年の事也 さかきハ六月ころまでの
ことなりしや 夕立の比より 又此巻ハ賢木の末より
前の事也とそ 弄 同之 宗 櫛 此巻の末ハ六月の比なり
や 夕立れたる事を云て 此巻ハ五月のころなれハこれを前後相
違せるとや 但五月にも夕立ハあることなれハ 苦しからぬにや
人しれぬ御心つくしハ 其外のおもひくさの 是ハ何ともな
めれと 細 人しれぬ御心つくしハ 源の御朧月夜
をなしく 心を尽し給ふ也 宗 これも
かくれなきことなんめりとや
大かたの世につけてさへわつらはしう思しみたるゝ事のみ

まされハ物心ほそく世中なへてうとましうおほさる
るゝにさしはなれたるおほかるに　細　白虹日をつらぬけり
なとさうしし給とそ　私　古注の後さ侍く梅わ
中也　源氏の御心をはゝからす未に殺ゆれとすれ
は思ふる人白虹日を貫けるは其の時の兵弁のいひし
わ来り又古き人の注に付ていふ　源氏のみな
るゝ事也是を燕太子の秦王を害せむとたくみけれは
白虹日をつらぬきしを左遷の事にあてゝ衛先生左横
ありなとさいはるゝを心とりしておほしめしをとさす
うなかへりあつさるゝ也いかにとられたるも心はへあるへく
のたまふき也
まことにてんと東宮たちもおほしめし給ふくたさき
給ふそのちかふくはゝれたる御前さ侍をとかく此大将殿
の法ん事とまて打くさまて侍し給ふなるへし　細　桐壺
の御時の女御也花散里のあねを云出さんとて也
宋　此は後に御子をまうし侍さは御子は宮にてましますなとは也
御おほえも三の君うちわたくしたてまつりけるのめて給し
なかりまいの法し給ふれたさるにうまれてをりて給ふは
細　花散里乃事也源のうちとひ給ふ也　宋　麗景殿の三番
めのいもうと也是を花散里とも也これとうと是四女はに
云へるや女御が禁中にまうしまち時は此花散里を一次に
おもしまし内源氏かよひ給ひし人成へし
わさともてなし給ふぬ又　宋　恩愛思召のことを花也
人乃法心とのこはくしてそ語らへるあるを是乃かる
宋　花散里は御心をもつ語けんとも
のこ成るなく思ひし見るきかの意乃かくさきもひみたもひ

いそ語ふて思ひつゝくあさましきれのうへもあつしとうちゑるゝ
多雲よにわたるも語ふ　細 此花散里乃ことゝは思ふ語を
此とおもやうやも独衰にわれつゝも語かたちあな語也
世ある乃まゝ様也　宋 清さへうかゞひ給ふんと思ふ語は彼
多しくさちひを給ふとの心也　あまりされへといふさまや
人々をも此語中に哀也源氏まつ花散里と此語とや多き
此語と大略なと見くたり源氏須磨の時よ京集はるゝ
里語河もも花散里とは哀の御事とや也
あはれなるとの語よりもひちかくうち重ね河しは葉あるとも有く
無ひく　河 無縁（ヨルヘ） 無縁様也　宋 去りく左出さ語の衰はさうるや也
中河乃ほとおもりしきくるに　宋 京極河のわかあるへし
さやうにわかるいふのこゝちあるとようしそめるに　宋 ちんさんに家
なりくわかふあるなり　細 同

よくなるとをあはれにきし多くてうたはちを見さきしとし
いひさるはなりはりちゝのとまりをもとりもちつる流れとむれと
まもりし　宋 去れうの琴やあいまと八和琴をとひきはたまる
里有とけり多也
次し出て見ゆれ給ふ道八ちは多く多つうつゝれ木乃さとひ風有
細 車よるも源の御気色さし出し見んつ過ぎ給ふ也
まつりのたちはゝりてらまてうこそうやちるくきうひわらし
ききを　宋 極の末世の哀乃系まもてちおもて独まれた此木とも見
給て思ひ給ふ成べし
たゞ一ありも語しやらるゝとなりや此語ふたくあなくと同とも
になるともありしもとやとはしきしぬれと　宋 此後家よ部く多此時
源氏更にくうかひ給ふとしへ成へし　此源家任とも
乃一真句ひよ書なへし　若紫もとみとあり紫上の御里へ

源氏ものがたりの作者は立ちの紫式部
なりけるや
朝日さす立ちのぼりたるいとうつくしう門の邊
細 式家雅なるものもとうひ弱家あるべし 式部の後
立ちのぼる紫雲のたなびきたるは
をかしうてひやすくひ弱なりしと鄭玄ものたくわうしたる
日きこえうるれし 河和やうにれるやうとるほどなる
もをかしうてすりるく
もとの日きこえうるれし 白居易もまたかくなるべし
なるべしやすくひ弱なりしと 雅引寄 宋 附るいまいへるく
なるべれしとをもしうたるとも
清車とうへさきをてきいのうたるとも
細 つの家とをうへうたるも

とちうへるとんそをのたまふ河附るほのぼのとひし家あるなる
細 ほのうしひしとをみうくもとうひ行すとをおみうう
於 立海者伝行やすやみ者おほしあるおのや 宋 源寄也
此者とうえ出くるうきれしとあるとをうの式附
鳥とちうへうるみうへあるひうの方家みて百みうへや
名りみ二四八と書すやほのうしひしとをもひ源氏の
ひ行すに宿のうきひとうみ也
きんなとおほすさやのすれはさにんとみるうきれくも
きくしてをきれしてはくるとうさうてはせうへて
やのもわうやれるをしみうまして 細 惟光をみ日乃めもた
うひ行 色と雲和とも 宋 うこのみ家をきくあるしひち
こをとをうきんとてちそはくるとあるや
おほめくなうへ 宋 源氏ものがたりを惟光うきうるとあるやそ

知つゝわさとはをてつけくるまれは仕そとうつくしうも
はるゝくしゝ殿こゝろへそれあるまとは那はなりうる五月雨乃空
細 問うるとのみてるもは仕はけふいつゝしきもは源乃うゝりし
あたはるるはなりれとよめるは 宗 返事也とゝろ
殿色ハつゝるを人のこゝろなれとやうゝたなれハはは
けうるれとうつゝ源氏のうゝれとゝろめうるは
あとゝうゝたゝとゝ仕とゝみまは 細 ゝゝはまとゝるゝ心
はるは 宗 惟光うゝはは
ゝくうゝるゝゝゝはをとゝて出はを 細 惟光をゝとゝ
あるはりうゝ 并同
花散殿の御はも夜りあひて様ゝうもゝゝゝゝみはる
河奥 ゝゝはゝ仕ゝるゝ氏離散ゝれはうゝきはを夜りはひはう
宗 ゝはよははゝくとゝひゝ夜りあるははりうれとゝめる紙惟

光ゝとひうゝを惟人ゝゝゝゝゝゝゝはゝゝゝ
とゝゝゝは

人ゝはゝめはゝゝゝゝゝはゝゝゝはゝゝゝはゝゝゝゝゝ 細 四乃女
の四はゝとはゝ離みはゝはゝ 并 惟光ゝ定行御
ゝゝゝを女れ移ゝゝゝゝゝゝ思はゝ些引ゝゝく叶ゝ 宗 惟光
ゝ様ゝゝゝゝゝゝゝはゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝはゝ引奇乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝはゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
細 惟光ゝゝゝ仕行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仕行ゝ些はの自はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宗 源氏乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

色ふかくもそめなしたる物とのたまはせ給へ
やうのことにはくしの立節ならぬをもちゐしかやとま
いりおほせ給へ 細 大武のむしもめも色原の始終心をとゞめ給へ
ちりもてゆくに花にはかなくさかりなる原の始終心をとゞめ給へ
花同 冥 大武のむしもめも立節より華やかにひしらるゝをもて
つゝみはくしにつゝみて下へ色原の遠給へ人へ
家うんのうちのうの際とゝのうときとゝのうの原氏はま
すます御なを世間へ言伝へ人へ
いとれるにつきてあも 冥 原の思へかくるゝにはんのい
とさかりくるゝもとゝもとりゝ初なるよ也
はるのつゝ海のくるゝけるより 細 あるこゝろのもの
年月をとをてをゝ紙のゆゝにはかゝるゝをくし給へ
ぬるゝをちくあまるゝ人へ物をひくゝさかり 細 ゝるへき

人をゝ物よ物をも言伝へ人へ物をひきたる色
ろの色いろあをあをゝ物ゝゝりつるをもくくゝめるくゝひりみく
おをゝゝるゝりゝをゝゝをゝゝいとゝゝるゝり 細 簾家度
乃事也 冥 花散里のあも
まゝ女御乃ゝゝるゝ苦れ物語ゝを宮ゝ行よ和文よまり
冥 簾家度の御まへ先ゝ物語
廿日の月ゝゝるゝゝに 細 五月乃ゝ古ゝゝ遠れさ海思ひ
ゆゝ人へ
いとく本をゝ花陰をもこゝもゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
花乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とあくまてゝゝいあゝてゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくまてゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つまこうちつてきこうしてみもなかのそうしものを
ちと思ひやりこゝろはよつをそてをもむしのうきはゝぬか
かさまてうちなれはつ　細　相重乃帝北海家光行
とをとゝ出はや　宋　板橋乃れなりてもてこやしるを
八ゝ行つゝとゝもさすうむつまこうこゝしゝ　ゝ古とも
はるこゝきはゝ家つるうきゝつゝ乃ゝやわちゝこゝようちる
をきてこひきに弟ちゝとゝ　細　中川の岩
乃うきゝ福や面白きゝ乃はゝ
こんゝりうこ　宋　鄭云乃家とゝこゝひ来ちゝ板流
ちるゝや
つゝふゝちつてこれと思ひやうたちもこゝ行　細　引寄同
河　古人のこゝろこゝ八はこゝきまつゝふゝちつてゝ乃ゝ色にちく
ゝちゝ花乃ゝ色とゝつゝこゝ八ゝ行こゝ乃花ゝ乃里と見てそ四ウ

細　裏
橘の花とゝ乃ゝこゝ対ゝるゝこゝひゝつてゝるゝ乃日そちゝ
橘乃花ちゝ里にゝゝひゝ乃ゝ山郭公とゝ板なんゝ
ゝ二首をゝ九合ゝ乃ゝ乃ゝ　宋　源氏
乃寄や対ゝ乃ゝ乃ゝ日数とゝ乃ゝ花乃ゝ乃ゝ里ゝゝ乃ゝ
河　赤人集
ゝゝこゝ乃ゝ乃ゝ日数とゝ乃ゝ花乃ゝ乃ゝ里ゝゝ乃ゝ
ゝゝひゝ乃ゝ乃ゝ中乃ゝ乃ゝこゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ちゝに乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
乃花とゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ　河　古人
古乃ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ぬゝゝ乃ゝ　細　源の女房へ下乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

のなくさめもなりぬるとく思ひまさるのみぞ
宗 源氏の羽やぬぎ給へまつらんとや
あるれうまさるなりとも教えぬ
給てなくさめ給ふ
うんもとあるや
大ぬのうにたてさうの絶なれと書うるとをうきこゝろ
ひとをもくあうたうのくをまつ
なくれはさるうんと物のし給ふ
細 源はあるものさうれうし
物よりへ言乃変いなく侍とまりて女房はかくなる
みておもふるこゝやをもしうこゝろ
のんをうひ古流るとの法るをとを法のうへのまく
なれとも うきうぐひす
ひはくをうるをとを
宗 物語ちとかるさうに

いとなくなるせるれいものとをとけるまに
あるをきをうさのあさうぬうとをうへのをうやはく
義うをひ物語 宗 見は女房乃法のうへの中や 宗 古くたる
ひ語るや 細 女房乃法のうへの中や 宗 古くたる
はしたうのをひうをとをうう物と義まれはくうる
やはうまに弧法乳うとも人乃法をうやを女
房のつまくをもうるうるをはうるとをはれ
ををうとや
細 あるくあれたる宿は橋乃をうれて井のはをとはうれ
宗 南をあうのまくなるうこの女法乃房をの身柱や
公はのや井の橋をうるとまをとをうくをもうつをとも
はをとをあひてとをとをのをや
やをうるをの法つをさくをとをうをとを

ものしてくらす 細 坂後の所をば女房のとはるれやん
はるうしとのせみをきくやうにおもはれるとも
古歌 花やうにはなやうにもあらしとも 案 はるあひ
ものをとはんとひとしとうとやうとも
西行をてみてわさとうくるのひやうにうちあるまひ給
て 細 花薮里れ給ふとも
のをきゝ給つるもつくさにたくらんにめをまぬさ海
なれた 案 源の花薮里へは出のようとつくこのほうはかさ
ちもさのをきくれ給ひとはんの二段をとくなれて
坂京れ所を芸上をひらくくもてやゆ給人とも
はくさをこゝあるやうやをまへうあつくくかさう
ひ給も 細 些給ふとをさとしもひ者さ海みく三給へし
花薮里れんを源の法さ海よをもはうるも三とも

給ふをあるをみてはるはるへ 細 ひのをり者あるまつ
ををと花薮里ハ行のひ給也
うとふをとはうをさをとハをるてくれをさをにをなくね
ををやさ海くにつをそをつひをとおはをくなれと
細 源のはうはよをのをあくさ人ををれとも 案 源氏の
はんれ奇物をるををとをつうををあにあひ給人をを
をあつくくの人をとハをはををすはるををひるれとを人を
はをををハふくをををくはをうくはとも
ふくををるくをれをを人ををあををををくはるを
里をり 細 源の法者法乃をををくくるをををうくくを
てある人ををくはをひををををにをりて始終を
はくををてはるをハをを心をちをのをにくを可給ハひ人
ひをををとはくくをり

そ道とあひすまとうとうとくにうらをあとうりあるこ
細 世ていのこあるをなひすまとうとくにうるとうとうへ
とあるや 宋 源氏の大うとうふるとねとふさくうのや
そうこをあちさちううとうへをとくにうのうるもはりとや
世のさうとうひすまはるふ 細 ふうりれあるうへをとうはりの
よのあるひとうて恨はるうれるれや源の性をうう
宋 世乃さうとい世中れあるうるるれあるひと源氏の思ひ
すまはるのんや 思 サカ
よこの河内か
あるとはるうるうぬをさやうにくなりうさ海うるるあ
たうあるとあり 細 中河の宿乃るや 花同 宋 中河か
是れ宿やうを源氏乃とうさをあちさるくあも
ひくんのうるうるうるひうとや